

今日この頃の新聞の二面はザビエル四百年祭の記事で埋められている。四百年昔、日本に渡来したフラソシスコ・ザビエルは、いわゆるキリシタン宗なるものをはじめ日本に伝えた人であった。わずか二年四ヶ月間日本にあって、キリストの福音を伝えた人であるが、聖人の列に入ったところのザビエルの右腕がこの度ローマ法皇使節枢機卿ギルロイ大司教その他多くの国際巡礼団と共に渡来して、長崎その他の地で四百年祭が盛大に行われ、写真に記事に極めてにぎやかに報道されている。

一五四三年に、ポルトガルの商船が九州の種子島に流れ着いて、はじめて鉄砲を伝えた。徳川時代には鉄砲のことを種子島と言った。それから六年後、一五四九年、後奈良天皇天文十八年、戦国時代の唯中、ザビエルは鹿児島へ来たのであった。それは信長が京都に入り、南蛮寺を造ることを許した一五六八年より十九年前のことである。彼はインドに於いて一人の日本人に会い、日本に来らんとして来たのである。当時日本は戦国の世で、朝廷も足利将軍も衰え、仏教も墮落して、人々は帰するところがなく、風に靡く草の如く、遂にキリシタンは七十万人になったとのこと、信長はキリシタンを助けて、本願寺と戦ったことは有名だが、一五八五年、秀吉はキリスト教を禁じ、やがて徳川時代は最も徹底して弾圧した。例の二十六人のキリシタンは京都から長崎まで死の行進をさせられて後、皆ハリツケにせられた。それから後のキリシタンは見つけ次第殺されるので、あらゆる辛苦をしつつ、しかも地下にその信仰を伝えて、明治に入った。そして遂に今日の四百年祭を迎えたのである。

五月二十九日、長崎に於ける盛大にして莊嚴なるミサの写真を見て、真に彼の人たちは悲痛なる歴史の回顧と、嚴肅なる歓喜にひたつていようことをお察しすることである。そして貴重なる他山の石として、私は、何時もの如く、「量よりは質」とささやくことである。ああ、一人のフランシスコ・ザビエル！偉大なる聖職者。

去年から本年にかけて、東西両本願寺では、蓮如上人の四百五十年の御遠忌が盛大に営まれた。末寺にも相継いで御遠忌が厳修されたことである。蓮如上人によつて真宗は、衰微から繁栄への道をとつたのである。上人また言語に絶する迫害攻撃の中にあらゆる辛苦艱難をなめて、お六字の種を播いて下さつたのであった。今更いふまでもないことながら何という宗教の迫害のきびしいことよ。先駆者の道のイバラに満ちたことよ。誤解、中傷、誹謗、破却、呪阻等々の全ては蓮如上人一人の上にあつた。しかしそれ故にその周囲には命をかけた御弟子があつた。命を捧げた師だから命を捧げた弟子があつたのだ。だが蓮師の御心中には、「信をとれ信をとれ」の御心より外はなかつた。「東西を走り廻りて言いたきこと」もこれだけであつた。

「蓮如上人の御時、志の衆も御前に多く候ふとき、『このうちに信を獲たる者幾人あるべきぞ、一人か二人か有るべきかな』と御綻候ふとき、各々肝をつぶし候ふと申され候ふ由に候」(聞書)。上人にも一人の信心が問題であつたのだ。

「一。一宗之繁昌と申すは人の多く集り、威の大きいなる事にてはなく候。一人なりとも人の信を取るが一宗の繁昌に候。然れば、専修正行の繁昌は遺弟の念力より成ず、

と遊ばされをかれ候」(御一代問書) この誰にも知られている御金言を真に頂かねばならぬ。仏法は唯信をとらして頂く為にある。それを忘れて名利の具にする、古今皆然りである。悲しむべし痛むべし。ここにも、一宗の繁昌は量よりも質、との仰せを見ることである。質の悪い量は、遂に量ではないのである。ほんとうは質量であつて、一つのものなのである。稲を作つて粃を取つても、実の入らないスクモがどれだけあつても、風に飛んで逃げて、ほんとうの米しか量とはならない。風の吹きまはしで粃殻がどれだけ集つて威の盛大を誇つても、それから新しい稲が出て来ようか。「一粒の麦」とよく言われるが、ザビエルは一粒の麦であつたのであろう。蓮如上人は多くの念仏の種を無明の田に播かれたのである。

自分が真に信に生きることとはなげておいて、何とかして人を多く集めることを考える。浅間しいことだ。自分は物知り顔の風情で、信はないくせに、あの手この手で、何とかして人を多く集めよう。迫害や非難をまぬかれて、よい子になつて両手に花で御念仏申す道はないか、浅間しいことだ。よく見て見よ。足がとまつているではないか。いらぬ御世話、そのいらぬ浅間しいあの手この手がなくなつたら御法は弘まつて下さる。その自分の聞法精進をやめにして人の御世話ばかりする、その相が火を消し、獅子心中の虫となつていることがわからない。自分一人が真に聞き、真に決定して御念仏に生きさせて頂け、それだけであとは親様まかせ。自分一人が真に充実した一粒の種になれ。質より外に量はない。

我等の御同朋の中には、誠にその存在が有難く尊く光つていられる方がある。「一、信心治定の人は誰によらず先づ見ればすなはちたふとくなり候。是れその人のたふときに非ず、仏智を得らるるが故なれば、弥陀仏智の有り難き程を存すべき事なり」と云々」、蓮如上人の仰せの通りである。信心決定の人は、その存在そのものが尊くものをいう。昔も今も同じである。しかるにその存在そのものは、ちつとも光らず、ものをいわない、燈のない提灯、火のない火鉢であるのに、如何にあの手この手を打つても、口が上手に動いても、遂に一人の人をどうすることも出来ぬであろう。やめた。やめた。いらぬお世話をやめ、沈黙して聞き、無有出離之縁の己に徹して真に御念仏申すことである。存在それ自身がものをいうに至れば、ことさらどうしようとしなくても、自然に、自信教人信の使命を果す身として頂いているであろう。

序に明らかにしておくが、我等の会座の開かれる場所であるが、決して立派な殿堂や、いわゆるお大家で開かれる事を、光栄と思つてはならない。御開山聖人の御一生を見るがいい、何時そんな事をなされた。そんな考えを持つている事は浅ましい事である。親様はそんな所に光つていられるのではない。どんな所でもいい。どんな小さい家でもいい、家がなければ河原にむしろを敷いてでもいい、ほんたうにそこで満ち足りてご法のご讃嘆が出来、真実信が生れるなら、そこに親様は光つて下さるのである。名利心の満足や、世間への体裁や、四方山見物の浮かれ調子で真実宗教、生死の一大事の解決がつくと思うのか。やがて死が来る。死さへ横超させて頂く金剛心

ではないか。四方山見物のだらしなき、自分自身の第一義の問題はとうの昔に解決したのではなくて、投げてしまふ。だからこそいらぬお世話がしたいのだ。何の値打ちもない私の為には、炭焼き小屋でも結構だから、決して金殿玉楼やお大家に入れようと、浮身をやつしてお世話をしたもうことなかれ。名利によつて集つた者は名利によつて散る、木によつて魚を求めの愚をくり返してはならぬ。念仏の行者は、唯正法によつて生れる。

甲の支部の集りに、乙の支部のことを評判していわく、「乙には、大物がはいつておられるから、それで支部が盛になるのでがんす」と。何という愚な見当違いの評であろう。乙の支部にどんな大物がいるか。そうではない。なぜ、一人の物腰の低い百姓男が、念仏一つに生ききつて、精進又精進、この人が口を開けば、誰も彼も耳をすまして傾聴しなければをられない、一人の念仏行者が存在するが故とは見えないか。その間違つた心が、自分を卑下し、時には高慢になりつつ、支部をありがたいものにするのが出来ないのである。そんなさもない心を川に流して、如何に貧しい存在であろうと一文不知の人であろうと、念仏に高下はない。皆如来聖人の御同朋御同行ではないか。大物とは、家が大きかつたり、肩書きがあつたり、学歴があつたりする人のことであろう。それに流し目をむけたり、御機嫌を取つたりする浅ましい心も、又それらに反抗して「何だい」という心も、どちらも聖人の御心にはかなわない。たゞ世々生々の父母兄弟、「信心決定して御念仏申しましょう」と仰せになるだけである。

私はかつて一度も、有縁の住職に「〇百の門徒を如何にするか」なんて言つたことがない。何百の門徒が一度に動きでもしたら、それは宗教ではなくて芸術である。「あなた一人御精進なされ、そして一人の門徒が真に念仏行者となつたらそれでいい。」第一、私が何首何千の人の住職にされても、どうすることも出来ない。そんなことをいう人があつたら、自分を知らぬ大言壮語というものだ。それでも、自分がどこどこで講演したら何百人の人が動いた。しかし、時間が解決する。大衆は薬を飲まずに、越中富山のハソゴン丹、効能書に感心したのだ。いよいよ我一人、脈をとつてもらい、苦くても薬を頂く者はなかなかいない。ほんとにいない。

そうじゃない。街の人、インテリ、先生、衛生講話に感心するとすぐに右から左に受売りが上手、耳口三寸の学問。蓮如上人もこれにはお困りなさつたと見えて、御一代聞書の五十九条に、

『皆人のまことの信は更になし。ものしりがほの風情にてこそ』近松殿の堺へ御下向のとき、長押ながしにおしておかれ候、あとにてこの意を想ひ出し候へと御綻なり。光応寺殿御不審なり。ものしり顔とは我は心得たりと思うがこの心なり』

はじめの歌は蓮如上人の歌である。近松殿というのと光応寺殿というのは同一の御方である。上人の十三番目の御子を蓮淳公と言つた。この方が、上人が越前へ行かれる時、江州の近松御坊をお譲りになつたので、近松殿という。又後河内の顕正寺をお開きなされたが御隠居なされて、光応寺殿というのである。この歌「皆人のまことの信は更になし、ものしりがほの風情にてこそ」と書いて、なげしにおしておかれた。

誠に頂くべき辛辣骨を刺す歌である。聞かしても聞かしても福助ばかり出来、観念屋ばかり出来て「まことの信は更になし」。これが上人のお嘆きであった。福助なら坐つて口上ならいくらでもいう。しかし頭が片づつて歩けない。行の足は更にきかない。蓮淳公の御不審に対して「ものしり顔とは我は心得たりと思うがこの心なり」と仰せられた。ぢぢももの知り、ばばももの知り、おやぢもおふくろも、息子も娘も皆もの知りになつては大変、木炭を千俵重ねても温くはならない。一切を捨てて信を獲させて頂くこと。一度ついたら火は消えぬ。量よりは質。